

初期デンマーク王列伝

★イエリング王権の王たち★

者を追悼する短い文章が銘刻された顕彰碑文である。多くは「AがBを記念してこの石を建てる」といった定型文であるが、なかには美しい装飾文様が描かれているものもある。スウェーデンの歴史家B・ソーヤーのカタログによれば、スカンディナヴィア全体で三〇〇〇基ほど、そのうちボーンホルム島を含めたデンマークには二〇〇基が残っている。実に興味深いことに、これらの石碑は紀元一〇〇〇年前後という特定の時代に集中して建立されている。それはなぜか。B・ソーヤーは、建立者が死者との関係に必ず言及していることに注目し、石碑は死者を顕彰すると同時に、その建立者と死者との関係を周囲に認知させる機能があると主張した。なぜそのような認知が必要なのか。それは建立者が、死者の持っていた権利、たとえば土地の所有権などの正当な後継者であることを主張しておかねば、権利の侵害が起こりえたからである。つまりこの石碑は、死者のためであると同時に、生者のためでもあったのである。紀元一〇〇〇年前後のデンマークは、キリスト教化、都市化、度重なる戦闘での死者の増加、イングランドからの富の流入など、さまざまな局面で社会が激しく変化する最中にあつた。ルーン石碑の建立運動は、そのような社会変動に対する一つの解答であつたのかもしれない。

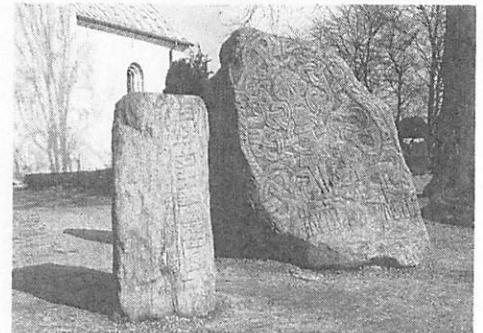
ヴァイキング時代のデンマークは、大陸やイングランドとの頻繁な交渉を通じて、ほかのスカンディナヴィア地域よりも深甚にヨーロッパ文明の影響を受けていたことは間違いない。その結果デンマーカーは、「キリスト教世界」という当時のヨーロッパ国際社会に、ノルウェーやスウェーデンに先駆けて参与することになつたと言つてもよいだろう。

(小澤 実)

ゴーム老王

メロヴィング時代以来、フランク王国の史料には少なからぬ「デーン人の王」を確認することができるが、デンマーク全体を統一し、領域性を持つた国家を建設したのは、ユラン半島の中部を拠点としたイエリング王権が最初である。

イエリング王権の開祖はゴーム老王(九五八年死去)と呼ばれた。彼の出自は不分明であり、当初から王というに相応しい力を持っていたわけではない。それどころかデンマーク各地には、王に匹敵する、場合によつては王よりも力をを持つ在地有力者が割拠していた。しかしながら彼は、そうした在地有力者の一人の娘チューラと結婚して権力基盤を固め、徐々にその権勢の及ぶ範囲を拡大した。少なくとも彼の治世期において、ユラン半島からフューン島にかけてのデンマーク西部は、イエリング王権の影響下にあつたと考えられる。彼は妻チューラのためにイエリングに小石碑を建立し、彼女を「デンマークの誉れ」とたたえた。それはゴームにとつて妻の持つ力がどれほど大きなものであつたのかを反映していたといえる。



ハーラル王によるイエリング石碑（右側）
(E. Røesdahl, *Vikingernes verden*. 7 udg.
København 2001, s. 263.)

ハーラル青歯王

イエリング王権のその後の展開に大きな影響を与えたのは、ゴームの息子ハーラル青歯王（九八七年死去）である。彼は、父ゴームが口火を切ったデンマークにおける権力集積を推し進め、シェラン島やスコーネといったデンマーク東部に至るまでの領域をその影響下におき、デンマークの統一を進めた。さらに、ハーラルはラーデのヤールと呼ばれるノルウェー北部の在地有力者と手を結び、ノルウェー南部へもその食指を伸ばした。そして後世の史料によれば、彼はボッポと呼ばれる人物のデンマークへの布教を認め、自らも洗礼を受けることで正式にキリスト教を導入した。ハーラルは、イエリングに父母を記念するために、美しい装飾文様の施された巨大なルーン石碑を建立した。そしてそこに、デンマークの統一、ノルウェーの支配、デンマークのキリスト教化という三つの大きな政治的功績を記した。このハーラルのルーン石碑はデンマーク国家のアイデンティティでもあり、日本にあるデンマーク大使館前にもレプリカが据えられている。

しかしながら、ハーラルが王として達成した事績は以上の三つにとどまらない。デンマークにはトレレボー型要塞といわれる直径一〇〇メートルから二〇〇メートルに達する円形要塞が四つあるが、これは考古学の調査によりハーラル治世期の九八〇年ごろに建設されたものであることが判明した。ほかにも、ユラン半島のラウニング・エンゲの木製橋の敷設や、南の境界を策定するダネヴィアケ堡塁の補修作業がハーラルの時代に比定されており、この時代は強大な王の権力を背景とした大建設の

時代であったこともわかつている。

スヴェン双髪王

九八七年、ハーラルの息子スヴェン双髪王は、父ハーラルをユムネと呼ばれるスラヴ人の地に追放する一種の宫廷革命を起こした。その理由は明らかとされないが、ハーラル青歯王によるドラスティックな国内改革に対する鬱積が、在地有力者の間に広がっていたからなのかもしれない。

スヴェンの時代はデンマークの内政面においても大きな変動を経験した。スヴェンのデンマーク王即位直後から、隣国（スウェーデン）のエーリック勝利王が何度もデンマーク領域内に侵入し、スヴェンはその対応に苦慮した。しかしながら九九五年にエーリック王が死去すると、その寡婦にしてポーランド侯の娘であったスヴェントラヴァ（シイリズ）を妻に迎えた。また、二人の娘をノルマンディ公とノルウェーの在地有力者ラーデのヤールに娶わせ、周辺諸国との良好な関係の確立に腐心した。その結果、九九九年にノルウェーのオーラヴ・トリュッゲヴァソンがデンマークに攻め入ってきた時も、ノルウェーの有力者ラーデのヤールとスヴェニア王ウーロヴ・シュットコーヌンの助力を得て、スヴォルドの海戦に勝利することができたのである。

父ハーラルとスヴェンとの最も大きな違いは、スヴェンの目が海外に向いていたことである。九九〇年代以降、スヴェンは在地有力者とともに、イングランドの中核地であるウエセックスやイースト・アングリアを中心襲撃を繰り返した。この時代のヴァイキングによる襲撃は、大規模かつ組織的であり、したがってイングランド側の被害も甚大であった。そして一〇一三年にはロンドンを陥落

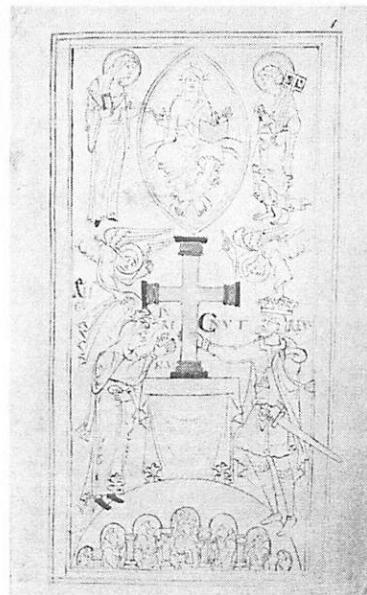
させた。時のイングランド王エセルレッド二世は、妻エンマと子アルフレッドのいたノルマンディへ逃走したため、スヴェンがイングランド王として認められるに至った。しかし、翌一〇一四年に彼はゲインズバラで死去した。彼の遺体はその後ロスキレに移送され、埋葬されたと伝えられている。

クヌート(クヌーズ)大王

スヴェンの死後、彼の次子クヌートは、イングランドに残ったヴァイキングの指導者となり、イングランド王権と戦闘を繰り返した。一〇一七年にエドマンド鉄腕王が死去した後、クヌートはイングランド王に選出された。

こうしてクヌートのイングランド統治が始まつたが、それは必ずしも平坦な道のりではなかつた。父スヴェンによるイングランドの略奪とデーンゲルトの賦課が、イングランド人のデーン人に対する不信感を生み出していたため、クヌートはまずその払拭に努めねばならなかつた。即位直後より、前イングランド王エセルレッド二世の寡婦エンマとの結婚、デーンゲルトの廃止、戦闘で混乱していた在地有力者や教会施設の土地や特權の確認、激戦地アシュドンにおける教会建設、そしてクヌート法と呼ばれる二部構成の法の公布といった、一種の信頼回復措置を立て続けに行なつた。このような措置はただヴァイキングの一指導者であつたクヌート個人の発想というわけではなく、彼のブレーンをつとめたヨーク大司教ウルフスタンのプログラムであつたと考えられる。

一〇一九年、祖国デンマークでの兄ハーラルの死を受けて、クヌートはデンマーク王位も継承した。一〇二六年にはデンマークの在地有力者、スヴェニア王アーヌンド・ヤコブ、ノルウェー王オーラヴ・



写本のなかのクヌート王と妻エンマ
(E. Roesdahl, *Vikingernes verden*, 7 udg.
København 2001, s. 263.)

ハーラルソンの連合軍にいつたんは敗北を喫したが、一〇二八年にはノルウェーに侵攻し、オーラヴを追放してノルウェー王位も獲得した。これと軌を同じくして、クヌートはヨーロッパ世界の国際政治にも積極的に参与した。一〇二七年にはローマを訪問し、ドイツ皇帝コンラート二世の戴冠式に出席し、その後娘グンヒルド(ゴンヒル)と次期皇帝ハインリヒ三世との婚約も結んだ。こうして、クヌートはイングランド、デンマーク、ノルウェーの三つの王位を手中にすると同時に、教皇と皇帝というヨーロッパの聖俗を代表する権力者との関係を深め、一世紀初頭のヨーロッパ世界にあつて屈指の君主としての地位を得たといえる。

しかしながら彼は一〇三五年にこの世を去つた。その地位は息子ハーデクヌーズに継承されたものの、彼が一〇四二年に死去することでクヌートの「帝国」は瓦解した。その後、デンマーク王によるイングランド遠征は計画されたが、実行に移されることはなかつた。デンマークのヴァイキング時代は終焉をむかえ、中世キリスト教世界へと移行しつつあつた。

(小澤 実)